

二〇〇三年から毎年のように小笠原諸島に通っています。昨年、世界遺産に選ばれ「うれしい」と思う反面、「大丈夫かな？」という思いもありました。歴史上、一度も陸続きになつたことのない海洋島であるこの小笠原諸島には固有の動植物等が非常に多く生存しています。しかし、他からの侵入がほとんどなかったため、外来種や環境の変化には、めっぽう弱いガラスの生態系を持つた島なのです。

日本人は「世界遺産」というブランドが好きですが、世界遺産に登録され環境の保護が徹底されて良い事ばかりかという決してそうではありません。屋久島が世界遺産になったとき、屋久島には受け入れ態勢がほとんどありませんでした。たくさんの人が、ガイドもつけずに好き勝手に歩き、美しい苔を枯らしてしまいました。世界遺産になったことが、屋久島にとっては不幸な結果になった面もありました。白神山地では、地元のマタギが森を守ってきましたが、世界遺産になった途端に「熊を殺すマタギは環境破壊だ、残酷だ」と非難されたり、国指定鳥獣保護区に指定されたりしたことでマタギ文化は姿を消そうとしています。

海外に目を向けてみると、アメリカのワシントン州にあるマウントレーニア国立公園は入山許可制で、許可を得ていない者は一切、入山することができません。公園内ではレンジャーの指導が行き届き、トイレの無い場所では、し尿を袋に入れて持ち帰ることはもちろんのこと、ごみも一切落ちていません。

魅力ある観光資源としての小笠原に接する作法

アルピニスト 野口 健

私は東京都レンジャーの名誉隊長として、小笠原のエコツーリズムの在り方についていろいろと関わらせていただきました。当時、無人島の南島は人が入りすぎて危機的な状況でした。罰則規定はありませんが、小笠原村と東京都との取り決めて上陸する観光客を一日百人までとし、お客さん十人に一人はガイドをつけるなど、徹底的な管理をすることで、現在は非常にきれいな状態が保たれています。

自然を守るにはお金がかかります。どのような徴収方法が良いかは十分な議論が必要ですが、小笠原諸島でも何らかの形での入島料のような微徴も必要なのではないでしょうか。入島料が入れば、保護管理の財源に充てられるし、長いスパンで考えれば植林、遊歩道の整備、植生の調査などなど、本格的、専門的に取り組んでいくこともできます。自然環境を守っていくには地元の理解も必要ですし、人もお金も必要になってきます。人々の環境への意識向上とともに、今では、自己負担を払う人はさほど多くはないと思われれます。

小笠原諸島への上陸は、何のための世界遺産かを個々で考える良いチャンスになるのではないのでしょうか。島の自然に接し、島の自然がよいと思うからこそ、それを守りたいという心が芽生えてくるのだと思います。環境問題は人間社会の問題。だからこそ、これから島に行かれる方々には、島のルールをよく理解したうえで入島していただきたいと思えます。

(のぐち けん)